様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６５３２４９

研究課題名（和文）日本・ドイツ・オランダの高等教育から考えるインドネシア人の留学

研究課題名（英文）Study abroad of Indonesian students: examining from higher education of Japan, Germany, and the Netherlands

研究代表者
有川　友子（Arikawa, Tomoko）

大阪大学・国際教育交流センター・教授

研究者番号：３０２７１４４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、教育人類学を専門とする申請者がこれまでエスノグラフィックなアプローチにて行ってきたインドネシア人留学生の文化習得に関する研究実績をベースに、大学における研究活動、所謂「研究室文化」について研究を行った。これまでの日本とインドネシアに加え、ドイツ、オランダを含めた高等教育の文化・制度・歴史について、教育人類学的なアプローチにより行った本研究は、グローバル化が進む中で、今日の状況に焦点が行きがちな留学の問題について、文化習得と歴史と高等教育の観点を含むこれまで以上に包括的、多角的な研究となり、新たな教育人類学の研究の展開としても貢献することができた。

研究成果の概要（英文）：　This research has examined how graduate education system of higher educational institutions influences the experiences of international students in their research, using the researcher's longitudinal ethnographic studies on Indonesain students who have studied in Japan and other countries. The research also examined the historical development of higher education and research in European countries. The extensive studies on literature on higher education and research have clarified the impacts which have given to Japanese higher education and graduate education and research from European countries until today. The experiences of informants have been closely related with the graduate systems and higher education systems which the Indonesians have studied.
This research has contributed in clarifying the close relationship between Education and culture, in particular about higher educational institutions and international study at both micro and macro-level.

研究分野：教育人類学

キーワード：教育人類学　留学　インドネシア　日本　ヨーロッパ　高等教育　大学院　研究

１．研究開始当初の背景

本研究は教育人類学を専門とする申請者による、留学と文化習得という大きなテーマのもと、インドネシア人の日本留学および日本留学経験者についてのこれまでの約 20 年間の研究実績に基づいている。この研究実績の中で浮かび上がった新たな観点について、本研究において取り組むことで、文化習得、留学生教育研究、そして高等教育の研究に新たな視点を与えることになる。

筆者による近年のインドネシア人元留学生を対象とした追跡調査により、留学先での経験が帰国後の活動や行動に影響していることが明らかになった。このインドネシアにおける元留学生対象の研究を通して明らかになった留学先の影響について、更に調べるために、本研究では日本以外の留学先の状況について研究した。元留学生の語る留学体験と帰国後の影響だけでなく、留学先の「研究室文化」について、日本以外の国のコンテクストにおいて調査することより、留学の影響についての研究を更に深めることを目的とした。

２．研究の目的

本研究では、教育人類学を専門とする筆者がこれまでエスノグラフィックなアプローチにて行ってきたインドネシア人留学生の文化習得に関する研究実績をベースに、大学における研究活動、所謂「研究室文化」について研究を行った。留学体験が帰国後の教育研究活動へ影響することが、筆者による日本留学経験を持つインドネシア人大学教員についての追跡研究から明らかになった。さらに日本留学経験者とドイツ留学経験者の教育研究活動の類似性を指摘するインドネシア人大学教員の存在が明らかとなった。この問題への関心から、本研究ではドイツの大学における「研究室文化」について研究した。その際、日本の高等教育が歴史的に影響を受けたドイツの高等教育の歴史についても調べた。更にかつてのインドネシアの宗主国オランダの大学の「研究室文化」、高等教育制度等についても調査し、グローバル化の進む今日のインドネシアの大学制度への歴史的な影響を検討した。

３．研究の方法

本研究では、留学、高等教育、大学院教育、研究についての文献収集を行い、高等教育の歴史と発展、特に大学院教育と研究との関係について調べた。歴史的観点からドイツの高等教育を始め、ヨーロッパの高等教育の発展、米国や日本の高等教育や大学院教育との関係についても調べた。今日の留学や高等教育の状況について調べるために、ドイツ、オランダを中心としたヨーロッパ諸国の現状について調べた。

また研究や科学の発展の歴史についても人類学的なアプローチの文献により調べた。

また本研究では、2013 年夏にドイツの大学を訪問し、実際に大学関係者へのインタビューを行った。またドイツの大学に在籍するインドネシア人留学生へのインタビューも行った。2014 年に訪問予定していたオランダの大学については、関係者の日程があわずに、訪問は断念し、文献による調査とともに、オランダ留学経験のあるインドネシア人元留学生のインタビューを参考に調べた。

更に日本の高等教育と日本人の留学について歴史的にも調べるとともに、日本の研究文化や大学における研究がどのように捉えられているか、海外の研究者による文献を収集し分析した。

４．研究成果

紙面の関係から、本研究に関係のある高等教育の歴史と研究関連の文献に関する議論は省略し、元留学生の追跡調査とともに、高等教育の変化に伴う考察に絞って議論する。

I.　元留学生の捉える留学先の研究環境と帰国後の教育研究活動

筆者は 2011 年から 3 年間、毎年インドネシアに元留学生を訪問し、インタビューを中心とした研究調査[1]を行った。本研究で対象とした元留学生は、理工系の博士号を取得し、帰国した大学教員もしくは官庁職員である。

筆者は 2013 年 8 月 17 日―26 日の 10 日間、中部ジャワの大学にて、大学教員 16 名を対象としたインタビューを行った。約 25 年前の日本でのフィールドワーク時からのインフォーマントを通して紹介を得た日本留学経験者、他国留学経験者であり、留学時期としては、約 25 年前の留学体験者から最近の帰国者まで含んだ。

本研究では日本留学経験者を中心としつつ、他国留学の経験者へもインタビューを行うことで、留学先としての日本と他国について、特に研究面での体験と、帰国後の教育研究活動への影響について調べた。

II.　考察

１．元留学生の語る留学体験と帰国後の活動との関係

事例を通して、留学先での体験をどのように元留学生が捉えているか明らかになった。また、帰国後の活動を通して留学の影響も見えてきた。帰国後の活動は元留学生である教員の現在置かれた環境や状況によるところがあったが、各インフォーマントが留学先での体験を踏まえ、教員として学生に対する指

導や関係性をどのように行うことが望ましいと考えるか、ということも含めて、判断し行動していた。

オランダ留学の学生のケースから、基本的に１対１で指導教員から大学院生への指導が行われていたことがわかる。そして研究のサポートを行う技師の存在とシステムがあるとともに、ゆるやかにつながる研究グループにおいて研究発表やディスカッションが行われ、フォーマルにもインフォーマルにも研究活動を行うシステムと環境があったことがわかる。

一方の日本の工学系の大学院での体験についてのケースから、日本語学習を行い、日本語を使いながら体験した研究室での密度の濃い生活があったことがわかる。教員間、そして学生間の上下関係とともに、その研究室単位での研究や研究以外の活動を含む活動があった。

また、日本の大学院に留学し、英語のみで学位取得可能なコースを経た元留学生も出てきたことがわかった。

更に英語コースにおける多様性も明らかになった。指導教員と留学生個人の１対１の指導はあったが、それ以外の日本の学生との関わりがほとんどないまま留学生活を送ったケースもあった。またセミナーの様子から、英語コースとはいえ、全てが英語の環境ではなく、セミナーも発表者により英語もしくは日本語を使用していたことがわかった。その一方で、英語コースであっても、研究室内の良好な関係を体験し、家庭的な人間関係について評価する元留学生もいた。

このことから使用言語やコースに関わらず、留学生の置かれた研究を取り巻く環境を含め、様々な要因が関係することがわかった。

２.「大学院教育」と「研究」から見えてくる留学

大学院教育と高等教育の歴史を振り返ると、他国から高等教育システムを取り入れたとしても、その地域の社会文化はもとより政治経済歴史等のコンテクストの中で、どのような組織や人々がどのように関係する中で高等教育が行われるのか、そしてどのように当事者が活用し、発展させるかにより、違いがあることがわかった。また「大学院教育」と「研究」という観点は、留学生が体験する大学院や研究活動との関係で重要であることがわかった。

近年、高等教育、大学院教育においてもグローバル化が進み、高等教育の標準化が進む可能性はある。その一方で、留学生の体験は各留学生の学ぶローカルなコンテクストから完全に離れることはできない。このことから、留学についてもグローバル化による標準化が進む一方で、ローカルなコンテクストによる多様性の進む可能性がある。

また留学生教育や高等教育の分野でそれぞれグローバル化の議論はされるが、政策やマクロレベルでの議論が多い。グローバル化により具体的にどのような影響があるか検討するためには、本研究における事例を通して元留学生の体験の多様性を明らかにしたように、ミクロレベルにおいて留学生個人の体験について丁寧に研究していくことが必要である。マクロレベルでの高等教育のシステムや制度、特に研究との関連で大学院レベルの教育制度やシステムに焦点をあて、歴史的観点から研究するとともに、ミクロレベルの具体的な事例との関係を通して、考察を深めることが重要である。

III.　終わりに

本研究では「大学院教育」と「研究」に関する文献を参考に、歴史的な観点を含めて検討した。その上で、インドネシア人元留学生についての追跡調査から、研究面を中心に留学生活と帰国後の教育研究活動について考察を行った。

元インドネシア人留学生についての追跡調査を通して、留学生の大学院教育の体験の多様性が明らかになった。留学生の留学先の経験は多様であり、帰国後、留学中の経験をどのように評価するか、どのように具体的に帰国後の教育研究活動に活用するか、元留学生の語りの中に、留学時の体験の影響が見られることがわかった。

今後も留学と高等教育、特に大学院における研究活動との関係を中心に、留学生教育研究について多角的かつ長期的観点からの研究を進めていきたい。

注：

１.　本研究は平成 23（2011）－平成 25（2013）年度の科学研究費補助金基盤研究（B）及び、平成 24（2012）－平成 26（2014）年度の科学研究費補助金挑戦的萌芽研究の助成を受けて実施した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３　件）

Arikawa, Tomoko, 2015, “Research culture and graduate education: Dynamic interactions from international students’ perspectives”, USLU, Ferit (ed.), e-Publication, INTCESS 15 2nd International Conference on Education and

Social Sciences Abstracts & Proceedings, pp. 1319-1325, ISBN: 978-605-64453-2-3, Feb. 2-4, Istanbul, Turkey. 査読有。

有川友子、2014、「インドネシア人元留学生が語る日本留学とキャリア－質的研究エスノグラフィックアプローチを通して考える－」（論考）、『留学生交流・指導研究』、第 16 号、35－45 ページ。（平成26年3月刊行）。

Arikawa, Tomoko, 2014, "The Impact of Studying Abroad over Time and Place: A Longitudinal Study of Indonesians Who Studied in Japanese Higher Educational Institutions", USLU, Ferit (ed.), e-Publication, INTCESS14-International Conference on Education and Social Sciences Abstracts & Proceedings, pp. 1526-1533, ISBN: 978-605-64453-0-9, Feb. 3-5, Istanbul, Turkey. 査読有。

〔学会発表〕（計　3　件）

Arikawa, Tomoko, 2015, "Research culture and graduate education: Dynamic interactions from international students' perspectives", Virtual Presentation at the INTCESS 15 2nd International Conference on Education and Social Sciences, Feb. 2-4, Istanbul, Turkey.

有川友子、2014、「長期的観点からの日本留学－インドネシア人元留学生の視点と留学経験の多様性を通して考える－」（単独ポスター）、異文化間教育学会第 35 回大会、平成 26 年 6 月 7－8 日（同志社女子大学）

Arikawa, Tomoko, 2014, "The Impact of Studying Abroad over Time and Place: A Longitudinal Study of Indonesians Who Studied in Japanese Higher Educational Institutions", Virtual Presentation at the INTCESS14-International Conference on Education and Social Sciences, Feb. 3-5, 2014, Istanbul Turkey.

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者　有川友子
（Arikawa, Tomoko　　）

研究者番号：30271448

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：